

郷土あかし

郷土館だより
第15号

五日市町立
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425-96-4069 有線4607

山人の信仰と旅

五日市町の石造物 その1. 廻国巡拝塔について



谷間の石仏。五日市町養沢神谷

はじめに

石造物といえば、まず思い浮べるのは路傍のお地藏さま、庚申塔、馬頭観音などであろう。風雪にさらされ、自然の一部にもどったような「野仏け」の姿は趣が深い。アルプスを背にした道祖神が信濃の旅のマスコットとして観光ポスターなどによく登場する。

ところで今年度、五日市町郷土館で町内の石造物調査をはじめた。これは野仏け類に限らず、石造物全般を対象とした「^{しっかい}悉皆調査」である。郷土の文化財として、また貴重な民俗資料としてその所在地、種類、造立年、銘文等をできるだけ正確に掌握しようとしたものである。数が揃えばその時代その土地の人情風俗、また造立者の心情が推察でき、郷土の歴史がより厚みをもって理解される。昨今、道路の改修がすすみ、自動車が奥地まで入

るにつれ、石造物はしばしば動かされ、盗難にもあう。また銘文は日時を経れば益々読み難くなる。当町内に多い伊奈石（砂岩）系の石造物はことに風化が早い。事は急を要すると思われる。

調査は目下進行中であるが収録資料は四百を超えた。五日市地区の石造物は決して少ない方ではない。今回その一端をご紹介します、大方のご理解に役立たせたいと思う。

一中世期の板碑、五輪塔及び墓石は調査の対象外とした。当地には地藏や如意輪観音を刻んだ舟型墓石がきわめて多いがこれも一応除外した。

1. 養沢・乙津・戸倉地区の石造物

調査は西の山間部（養沢川流域と秋川本流の檜原村境

表1. 養沢・乙津・戸倉地区石造物

種 類 造 立 年	廻国巡拝塔	馬頭観世音	庚申塔	念佛塔	地蔵	三界万霊塔	月待塔	聖徳太子塔	聖観音	道標	道祖神	道橋供養塔	計
	廻国巡拝塔	馬頭観世音	庚申塔	念佛塔	地蔵	三界万霊塔	月待塔	聖徳太子塔	聖観音	道標	道祖神	道橋供養塔	
1690~1719(元禄3~享保4)			5	1	2								8
1720~1749(享保5~寛延2)	1		1		2				1				5
1750~1779(寛延3~安永8)	6		3	3	2	2			2				18
1780~1809(安永9~文化6)	12	1	2	4	1			1	2				23
1810~1839(文化7~天保10)	4	2	2	6		3					1		18
1840~1869(天保11~明治2)	8	12	1	3	2		4	3		1	1	2	37
1870~1899(明治3~明治32)	2	3	1	1	1	1	3	1		1			14
1900~1986(明治33~昭和61)		8			3					1			12
年 月 不 明		5	5		5	3							18
計	33	31	20	18	18	9	7	5	5	3	2	2	153

表2. 種類別石造物数 153点

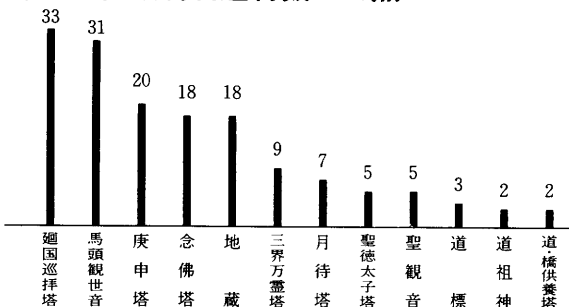


表3. 造立年別グラフ (不明を除く 135点)

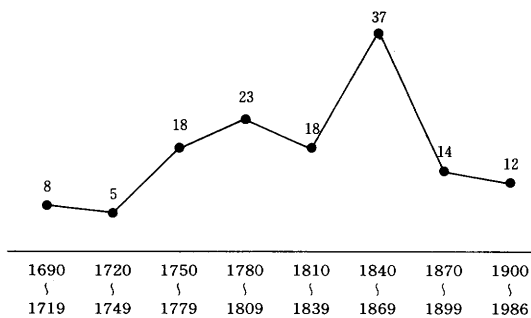
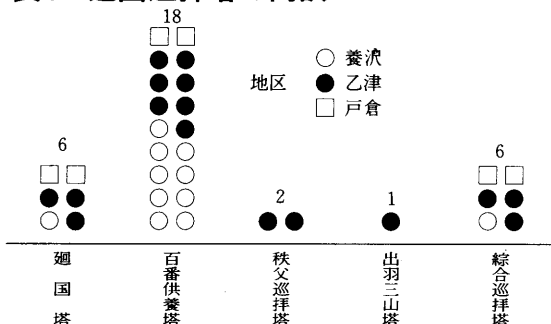


表4. 廻国巡拝塔の内訳



より沢戸橋まで) から始めた。この地区は伊奈石があまり使用されず、保存状況もよいので、銘文もよく読める。これを集計し表1・2・3にまとめてみた。表について若干の注釈を加えると、

イ 種類別の数は表2にみるような順である。意外なことに、山間部なら当然多いはずの馬頭観音をぬき、廻国巡拝塔が33基で一位を占めた。総計153基、この数は今後の調査で更にふえる見込みである。

ロ 念仏塔の中には寒念仏供養塔や南無阿弥陀仏と刻んだ名号塔を含む。

ハ 分類に当って刻像より造立の主旨を優先させた。従って地蔵の台石に三界万霊の文字があれば、三界万霊塔に入れた。

ニ 表3は造立年を30年刻みにまとめたグラフであるが、当地の造立が元禄期にはじまり、幕末期に昇りつめている状況がわかる。庶民生活の物心両面における発達経過がこんなところからもうかがえる。

ホ 表1から種類と造立年の関係を見ると、庚申塔が古く、馬頭観音が新しいことがわかる。地蔵の造立が各年次に分散し、巡拝塔のそれが一時期に集約されていることもわかる。短期間に造立数が多いのは一種のブーム現象があったことを意味しよう。今回はこの巡拝塔に焦点を合わせ、そこから地域の特性を探ることとした。

2. 廻国巡拝塔とは

ここで廻国巡拝塔として一括した石造物は細分してみると表4となる。以下これに従って説明しよう。

イ 廻国塔 廻国とはお経(大乘妙典=法華經)を納めながら諸国を巡ることで、全国66か国を巡る納経の行者を六部と呼んだ。彼らが納経を終えた記念に建立するのが廻国塔(大乘妙典供養塔、日本廻国供養塔など)である。当時日本全国を巡るのは何年もかかる大事業である。従って廻国塔の造立者は他の巡拝塔と違い専門の宗教家もしくはそれに近い在地の信仰者であったようだ。



表4の6基の造立者のうち3基までが僧侶名である。当時旅の六部に施しをすると功德があるという風習もあって、六部たちは喜捨をうけながら殆ど無費用で旅をした。一般の巡拝が自費負担の旅で、信仰の旅といえながら慰安の意味も含まれるのに、六部の旅は旅そのものが修業で、そこに廻国塔のもつ厳しさがある。ただし、廻国塔の造塔は廻国修業を行ったことを示すためのもので、必ずしも全国行脚の完了を意味しないようである。

ロ 百番供養塔 巡拝塔の中心で数も最も多い。江戸時

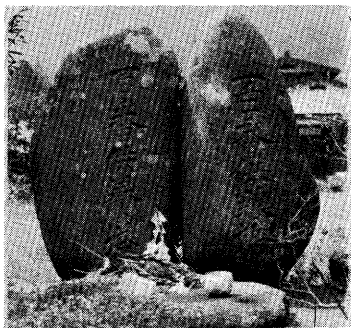
代の庶民の間に観音信仰が高まり、観音霊場をめぐるお札を納める風が起ったがその際数多くの霊場を廻ればそれだけ功德くどくが大きいとされた。西国33番、坂東ばんとう(関東)33番、秩父34番の霊場(札所)計100番を廻って建てるのが百番供養塔である。巡拝は供養塔を建てることで完了するので、造塔は功德を確かなものにする必要手段なのである。表5は造立者の内訳であるが、巡拝には女性がよく参加し、特に夫婦で信仰の旅をしていることがわかる。これは当時の女性の処遇を語る有力な物証である。



写真は養沢地区怒田畑ぬたばた公民館前前にある百番供養塔であるが、この造立者は谷合四郎右衛門、同野系、同苗四郎左衛門、同まさ、と刻まれている。

天保10年の造立年を人別帳で調べると、当主四郎左衛

門44才、妻まさ30才、父(隠居)四郎右衛門70才、母乃糸59才と判明した。親子二夫婦で巡拝の旅をしたことになる。谷合家は養沢村の村役人をつとめる有力者であるが、この巡拝塔でみる限り、親子夫婦円満長寿で、恵まれた一家であったようだ。百番供養の旅は信仰と同時に慰安の旅であり、生活に多少なりともゆとりのある者でなければ行えないはずである。同じ養沢村寺岡の岡部精一氏庭に仲良く並んだ百番供養塔がある。右は文化6年(1809)岡部清七、妻□か、左は天保11年(1840)岡部弥平、とある。

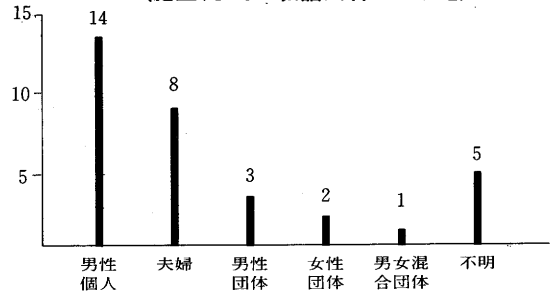


これも親子相伝の旅の記念碑であろう。

ところで、秩父坂東はともかく西国33番は本当に旅をしたのであろうか。西国の霊場は現在の京都、大阪、和歌山、奈良、滋賀、兵庫、岐阜の二府五県にまたがるので、実際に旅をしたら大変なことになる。当時の江戸には「西国札所写し」と称して、西国33番札所を模した参詣所が護国寺境内などに造られていたという。当然利用

表5. 造立者の内訳

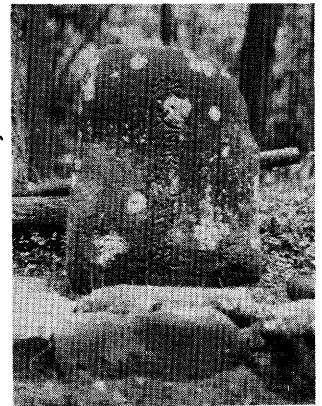
(施主、または世話人名より推定)



されたことであろう。坂東33番も大方は江戸で用が足りたらしい。そうすると実際には江戸見物と秩父行で用済みとなる。しかしこれだけでも山の人間、中でも女衆にとっては一生一度の大旅行であろう。帰って供養塔を建てることは、信仰はとにかく隣近所の羨望を集めたのではあるまいか。供養塔の石は養沢川や秋川の川石(硬砂岩)が多い。石が入り易かったことも造立を容易にしたと思われる。造立場所は自分の屋敷内、内幕、あるいは近隣の路傍である。

八、秩父巡拝塔(秩父順礼塔) 2基あるが、前記百番供養塔の先駆的な意味をもつ。ともに女性集団の旅であるのが面白い。寛延元年(1748)の碑(乙津橋伏橋西)の裾に

乙津村 武兵衛妻、彦七母、恵参、勘左門母、与市母、治左門母、作兵衛、勘右門夫妻、青木平 彦左門母、宗左門母と刻まれていた。男も混るが主力はお婆さん連である。お蚕かいこ、糸取りで溜めたへそくりを握っての旅、それも隠居身分にな



ってはじめて許された旅であろう。まだ足腰のたつうちに後生安楽を願う旅であると同時に生まれてはじめて狭い谷間の暮しから解き放された旅でもあったろう。この当地区最初の巡拝塔の造立は僧名の同行者恵参の提唱であったか? いずれにせよ建碑は順礼者一同に深い法悦を与え、山陰の小碑は婆さま連の形見として地域の語り草となったのではない。

今一つの宝暦12年(1761)乙津竜珠院境内の秩父巡拝塔には「乙津村女中同行廿四人」と刻まれていた。今ならさしずめ農協主催のバス旅行というところだろうが、バスの旅では石に刻むほどの執念は残らない。

ニ 出羽三山塔 湯殿山、月山、羽黒山の三山（山形県）詣の記念碑である。写真の碑は乙津の乙訓由雄家の庭にあり、造立者乙訓七兵衛、造立は明治31年で、巡拝塔のうちでは最も新しい。これは山岳信仰にもとづく靈山巡りであるが、信仰の旅と



いう点で観音靈場巡りと変らない。敢ていえば男性向きであろうか。この碑には七兵衛の父三左衛門が三山詣をし、参り残したところを七兵衛が継承成就して建立したという伝えがある。

ホ 総合巡拝塔・これは筆者が勝手につけた呼称であるが、百番札所巡りの外に四国八十八か所の弘法大師聖地巡り、いわゆるお遍路、それに出羽三山巡り等をミックスしたものである。乙津落合の徳雲院には文政10年森屋権平、とよ夫妻造立の碑があり、西国坂東秩父、四国三山がそろって刻まれている。また戸倉久保河原の私市寛吉家には上記の外に金華山立山を加えた碑があり、さらに同家には関連の納経帳5冊が残されている。こうなると畢生の大事業である。よく麦を播い旅立ち、麦の



熟する頃帰ってくるという話を聞いたが、それを幾年となく繰返してやっと念願成就するのだから留守の家人も大変であつたらう。私市家所蔵の納経帳によると、旅は天保12年（1841）正月にはじまり、弘化3年（1846）5月に終わっている。西国も四国も出羽三山も省略することなく巡り歩き、足跡は九州大宰府に及んでいる。供養塔の造立は弘化4年8月吉

日。造立者私市徳兵衛は利倉屋徳兵衛と称し、成功した荒物商である。彼は商売に注いだ情熱を巡拝にふり向け、番頭1人を共に全国納経の行脚に旅立ったらしい。この供養塔ははっきりとした生き甲斐を掴み、それを貫いた数少ない執念の人の記念碑である。

さてこの巡拝塔を総括すると、やや性格の違う廻国塔は別にして、先ず秩父巡拝塔ではじまり、百番供養塔がつづき、最後に三山塔や総合巡拝塔になるようだ。信仰の旅もより大なる功德を求めるうちに、足は自然と遠い異郷まで及び、大がかりになるようである。

おわりに

五日市町の他地区の調査をすすめるうち、巡拝塔の数は必ずしも多くないことがわかった。山間部が突出しているのは何故であろうか。養沢川流域に百番供養塔が多いのは林業と無関係ではなさそうだ。山持ちが山を売るのは長い育成期をかけた後だが、とにかくまとまった金が入る。そこで古女房をともなって後生安楽の旅に出るこの谷には有力山持ちが多い。うねうねと曲る川沿の隈々に彼らの百番供養塔がたつ。大多数の村人の暮しといえば、男は山仕事、女は糸とり、そして猫の額ほどの畑仕事、見上げる谷間の空は狭いのだが――。

最後に巡拝塔は文字ばかりで面白くないという方のために像をもつ百番供養塔をご紹介します。但し所在は町内留原の山下忠氏宅。珪化木に如意輪観音像を浮彫している。ちなみにこの像塔は新編武蔵風土記稿留原村の項に収録されている。

